原罪のノクティス

蜃気楼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
原罪のノクティス

【Ｎコード】
Ｎ８６６０Ｙ

【作者名】
蜃気楼

【あらすじ】
２０１９年　日本

東京都心を中心として発生した大規模な地盤沈下。それは都心を巨大な大穴へと変え、何千の命を奈落へと吸い込んだ。
政府は安全の一時策として大穴を囲うように巨大な壁を築く。しかし、何年かければ総ての壁が築かれるのか？　それさえも不明なままだが、それがその時にできる精一杯の対応策だった。

一年後、災を免れた学生たちに噂が飛び交う。「壁の向こうでは穴から出てきた怪物が死骸を貪り食っている」「未知のウィルスが発生し、ゾンビになった人間が何人も壁に縋りついている」

ただの噂だ。何の証拠もない。頭のいい現実主義者はそう言って鼻で笑う。――――――でも、もしかしたら……マイナス思考の人間は恐れを抱く。

そんなことが普通の時代。一人の学生が高校を中退した。若干伸びた黒髪に眼の下のクマが少し異彩を放っている以外は至って普通の少年。容姿も飛び抜けて良いわけでもない。

少年はいつもよりも断然早い時間、仕事場であるとあるファミリーレストランのチェーン店へと足を運び、一人黙々と開店の準備をする。店長不在の店で代理である少年の日常はいつも通りのはず――――――だった。

――――――――――――幼馴染が亡くなったと知るまでは………

Prelude

────────ポツリ。

一滴の雫が天より降り注ぐ。……雨だ。

────────ポツリ、ポツリ、………ざぁぁぁぁぁぁぁぁっ。

一定のリズムを刻んで降り注いでいた雫はやがて、勢いを増し流れていく。

自然が起こした現象を誰も止めはしない。勢いをなお強めていくこの雨が傘を持たない人にとってどれだけの害になろうが、自然──────────神はそんなもの知ったことではない。

足元を見れば、ほら。ぽっかりと空いた底の見えない闇の穴。奈落は直ぐそこだ。

東京都　千代田区。

と、”呼ばれていた”この地は既に半分以上死んでいる。一年ほど前は文明の英知を誇った大都市、首都の一部、行政機関さえ置かれていたこの場所も今ではただの『災害地区A』という全く味気のない。価値の欠片もないまるで廃棄物のような扱いとなってしまった。一年ほど前に何の前触れもなく、東京都心で発生した大規模な地盤沈下。余震もなく、本当の意味で突如発生したそれは老人の驚きも若者の叫びも幼児の泣き声も、喉の奥から発することもできず全てが奈落へと一瞬にして呑み込まれていった。日本の行政府が消え去ったことにより国民は混乱し、一時は国が崩壊する恐れさえあった。だが、友好国であるアメリカ合衆国の政府が一時的に支持を取ることで混乱は鎮圧される。

そして、安全政策の一時的措置として円形状に見事な形を作り出し、地図に一生残り続けるぽっかりと空いた大穴、『災害地区』を囲うように壁が建設されることになった。

ここはまだ壁の建設の進んでいない、所謂『立ち入り禁止区域』。立ち入り禁止とご丁寧に黒と黄色で大きく書かれたビニール製の看板と同じ色のロープで線引きされているものの、安全は全く保障されていない。

――――――――――この場所でひとりの少女が自殺した。

新聞にもテレビ、ラジオのニュースでも、ネットでもあらゆるメディアにこの情報は大見出しで取り上げられた。

「災害によって失った恋人の後を追った」「家族のいる地の底へと行きたかった」「この世界に絶望して、生きる意味を見いだせなくなった」

ネットの掲示板や新聞各社、哲学者、心理学者、精神科医。様々な人間が憶測を語り合う。

家族でも友人でもない人間が、勝手に人の『死』に理由をつけて、いかにも「彼女は悲しい存在だった」と世に知らしめる。一体何様だ？　あんたらは他人の感情を手に取るようにわかるサイコメトリーでも持っているのか？　ほぼ１００％違うだろう。

崖の淵で降り注ぐ雨がどんどん、底の見えない穴へと流れていく。

学生たちの間で流行りの噂がある。

《壁の向こうでは穴から出てきた怪物が死骸を貪り食っている》

《未知のウィルスが発生し、ゾンビになった人間が何人も壁に縋りついている》

ただの噂だ。何の証拠もない。頭のいい現実主義者はそう言って鼻で笑う。――――でも、もしかしたら……マイナス思考の人間は恐れを抱く。

そんな壁の向こうへと自殺した彼女の遺体は見つかっていない。いや、誰も見つけようとしない。

警察も消防も、軍も家族も。どんな人間も組織も目の前に広がる奈落を恐れ、関わろうとはしないのだ。彼女の葬式は昨日行われた。もちろん遺体のない状態での葬儀。美しい長い黒髪の彼女を見た最後の顔は少し前に撮った写真の入った額で儚げに笑っていたものだった。

「…………許してくれとは言わない。けど、ごめん」

少年は懺悔した。若干伸びた黒髪は普通だが、目の下に少々できたクマが普通の少年には特徴になっている。

崖の淵に一歩前へと進み、手に持った花束をギリギリのところに置く。ビニール包装された花の束が雨水に打ちつけられ、その花弁が揺れる。色とりどりの花は葬儀に使うことのなかった供花であった。

ポケットに手を入れる。豪雨の中一度も使用されない折りたたみ式の傘だ。傘を開くと、供花を覆うように傘も地に置いた。

目線が傘のほど近くまで来ると合掌し、黙祷。それは三十秒ほどで終了した。

「また、来る……から、……」

立ち上がると、少年は瞳を一度外套の袖で拭い、方向を反転させ、歩き出した。

―――――――この日が少年、蒲武（うらむ）　陛斗（へいと）にとって最後の日であった。

Ｐｒｅｌｕｄｅ（後書き）

構想は一年以上前からできていたものの二次創作ばかりで、オリジナル小説は初となります。

まだまだ序盤ですが、感想など頂けたら幸いです。

第一夜　堕天――Ｆａｌｌ　Ｄｏｗｎ――

『――――被害者はこれで三人目となります。しかし、現在も犯人は特定できず、警察による捜査が現状も続けられております。……次のニュースです――――――』

東京都、否『経済首都・東京』の墨田区。東京スカイツリーが完成してそこそこの年月がたったこの地に存在する、多店舗チェーンレストランの事務室で流れるテレビニュース。
テレビの正面の机で売上表を確認しているのはまだ若干の幼さが有るものの、職を持っていても可笑しくは無い年齢の黒髪の少年。
少年、蒲武（うらむ）陛斗（へいと）はファイリングされた表のページをめくる手を一旦休め、黒いレザーの張られたキャスター付き事務用椅子の背もたれに大きく寄りかかって息を吐きながら背伸びした。気になる程度ではないが、目下の若干のクマが陛斗の不摂生な生活を物語っている。
欠伸をしながらつい先ほどの事を思い出す。

――――――――天木第零（あまぎだいぜろ）高等学校女子生徒連続殺人事件。

ついさっき流れていたニュースだ。現在も犯人が逃亡中どころか、特定さえできていない殺人事件である。
狙われたのは墨田区にある高校、天木第零（あまぎだいぜろ）高校に在籍する女子生徒。
最初の犠牲者が報道されたのが四日ほど前。二人目の犠牲が報道されたのが、二日前。そして、今日報道された犠牲者で三人目だ。
死因は不明。おそらく惨殺。ただ、全員が内蔵から脳に至るまで全てバラバラにされ、ブロック状の肉塊と化していたらしい。ＤＮＡ鑑定というモノがなければ本人と特定することなどまず不可能なほどひどい有様だったらしい。まったく犯人は被害者にどれだけの恨

みを持っていたのか、それともただの変態の殺人狂なのか……。

陛斗はこの連続殺人事件と全く関わりのないというわけではなかった。被害者の通っていた天木第零高等学校。その学校に陛斗とその幼馴染、八束（やつか）小夜合（さより）はその学校につい一週間ほど前までは”通っていた”のだから。

正規の卒業をしたわけではない。だからと言って、何か問題を起こして退学したわけでもない。ただの諸事情による自主退学だ。

このレストラン。元はきちんとした店長がいたのだが、突如として謎の失踪を果たした。つい昨日まで大らかに笑っていた人間が事務室の机に「探さないでください」と白いＡ４サイズ用紙に小さく書かれたものだけを残して消え去ったのだ。その月の給料も頂いていないアルバイトの人間にとっては堪ったものではない。

その時点ではただのアルバイトだった陛斗はバイトの中でも最古参だったので、周囲からの推薦で勝手に『店長代理』という箔が押されれた日から早二ヶ月ほど。店長代理と行っても店長のする仕事と全く変わりないことを繰り返していくうちに学校へ行き、その後仕事をする。それで一日終了。

さすがに社会人でもない。まだ若干十八歳の受験生がこんなことを繰り返していたら普通に身体を壊す。それでも二ヶ月耐えたのはさすがという他ないが、寝込む期間は約二週間。その期間中に陛斗は布団の中で決心した。

「学校辞める。……ああ、辞めてやるさ。身体が持たん。俺はまだ十代だぞ？　なんでこんな青春の欠片もない生活送ってるんだ？……腹立つ」

いや、そこで辞めるんだったら学校じゃなくて店長としての職じゃないのか？
陸斗の幼馴染の小夜合がその場に居たら透き通る声ながらの男言葉で絶対にこう諭しただろうが、生憎とほぼ一日中看病していた彼女は一時間以上前に去ってしまった。その時既に午前一時半。
それでも陸斗は高校三年が潮時なのかもしれない、と随分前から感じていた。
高校入学当時、なんとなく根暗な感じのオーラを放っていた陸斗は金髪、紫、ピアスに指輪。光りモノでぎらぎらと装飾した男たち。所謂不良というものの恰好の獲物だった。

昼休みに廊下でいきなり蹴る、殴るなど暴行のような大胆なモノから、机に入れていた教科書のページが表紙と背表紙を残して全て消え去る。座席が無くなるなど陰湿なモノまで、虐めのフルコースを一度は味わっただろう。最も陸斗は何か意見することも報復することも一度たりとも無かったのだが……
陸斗は高校一年が終盤を迎える時点で、突如キレた。
本当に突然だ。昨日まで虐めを甘んじて受けていた（周囲にはそう見えた）陸斗が教室に入って、自分の机の中身を確認するなり、机を約７ｍほど先まで不良の屯（たむろ）っていた机を巻き込みながら蹴り飛ばした。
その時は不良どころかただの一介のクラスメイトも唖然としただろう。根暗ないじめられっ子がいきなりどこから沸いた脚力で机を蹴り飛ばして不良に喧嘩を売ったのだから当然である。
もちろんプライドの無駄に高い不良共がその行為を黙って見過ごすわけもない。握り拳で指をボキボキと鳴らしながら金髪リーゼントのいかにも特攻隊長のような男が先鋒として出陣した。
結果。ボキボキしていた指どころか足の指まで余すところなくボキ

ボキにされて全治三ヶ月。

中堅として参戦したのは重力に逆らってツンツンに立った紫髪のヴィジュアル系なり損ない男。

「リーゼント（仮）の仇は絶対に取ってやるよ！　許さねぇ！」など勇ましい言葉を並べて次は首をゴキゴキと鳴らして指をグーパーさせて出陣。

結果。首はさすがにボキボキにならなかったもののしばらくは空を見上げ続ける生活になったそうだ。

大将はこれまた個性的。ぶくぶくと太った巨体に、膨れた顔には銀色のピアスが幾つも突き刺さって見る側が痛々しい。わけのわからん英語（？）のようなものを高らかに吐きながらいきなり大振りの右で渾身の一撃を放った。

結果。顎（アゴ）がとにかくヤバイことになったらしい。アゴが。

当然のこと三人とも病院送り。救急車で搬送される三人。陛斗は生徒指導の教師に抑えつけられながらも、運ばれていく三人に対し窓からこう言い放った。

「今までの教科書代全部纏めて弁償しろやゴルァァァァァァァァァァァァッツッ！！！」

普段の蒲武くんじゃない……。鬼と形容するのが甘いくらいに恐ろしい表情で吠える陛斗にクラスのほとんどがそう恐れを抱き、教室から教師に連れ出されていく陛斗を恐怖の瞳で見つめていたが、一番後ろの席に座っていた幼馴染、小夜合(さより)はその様子を読んでいた本から目を離してくすくすと笑いながら見守っていた。

その後、同学年から高学年まで何度も学校の不良に絡まれ、病院送りを繰り返してきた陛斗だが病院から戻ってくる不良に復讐されると思いきや、戻ってきた不良は絶対として陛斗に対しこう叫ぶ。

――――――――――アニキぃ！　一生付いて行きますぜいっ！

いつの時代の任侠物語だ。全く持って意味がわからない。
あー、別に兄貴とかどうでもいいし、一生付いてこられたら迷惑だし、ただ教科書代返して。
そう気だるげに言う陛斗に対し、財布ごと渡す不良。……しかもあまり金は入っていなかった。
どうでも良くなったのか次々と渡される財布から一銭も取らずに陛斗は全て持ち主に返還した。一部の不良はかなりの金額を財布に入れていたが、清いものではないだろう。
しかし、その行動がさらに不良が心の中で持つ”アニキ度”とやらに火をつけ、益々意味不明のまま”アニキ”として尊敬されてしまうことになるのだが。
そんなことも有り、なんだかんだで一学年なのに学校の不良頭とされてしまった陛斗は他校とのイザコザに本人の意思などないまま巻き込まれることになってしまい。やがて停学処分を食らった。
他校とのイザコザのお陰で唯一の友人と呼べる存在を得たのが唯一の救いだったが。

結局、様々な要因が重なって自主退学という道を選んだのだ。あの時は面倒と思いつつもなんだかんだで楽しかったのかもしれない。今でこそそう思うが、戻りたいとは思わない。

ただ、陛斗にとって一つだけ後悔はあった。”彼女”には話しておけばよかった、と。

――――――――――旧千代田区『災害地区A』での女性徒転落自殺。

天木第零（あまぎだいぜろ）高等学校女子生徒連続殺人事件が発生する前に世間を騒がせ、メディアを一人占めしていた自殺事件。

『災害地区A』旧千代田区の立ち入り禁止現場にて天木第零高等学校の女性徒が自殺したという。なんとも単純なものだ。しかし、それは都心で大規模な猛威を振るった大地盤沈下（グランド・フォール）にて大きな悲しみを生み出したことの象徴とされた。

恋人の後を追った。両親、家族の元へと逝った。様々な死の理由を付けられた人間。それは陛斗の幼馴染で同じ高校に通っていた八束（やつか）小夜合（さより）という少女である。

長く美しい黒髪が特徴で学校の看板とも言える美少女。ぶっきらぼうな男言葉が妙に似合っていて、男子生徒からは憧れ、女生徒からは頼りにされる。まさに絵に描いたような少女だ。

偶然か必然か、幼稚園からずっと陛斗と学び舎を同じくしているため、関わりも深く、陛斗の弁当は小夜合が毎日作っていたという。

誰に対しても毅然とした態度で、一言で例えるなら”凛”。着飾った金のような美しさではない日本刀のように洗練され、無駄のない。そして鋭く、人を引き付ける。そんな魅力を持った少女が、何の前触れもなく自殺。明らかに不自然な節がある。

陸斗は自殺の原因が、自分と何らかの関わりが有るのではないかと考えてやまない。……自殺した日が学校を退学した翌日だったからだ。偶然にしては良く出来過ぎている。
しかし、だからと言ってそれを解明する術は無い。死者にはただ祈りを。
失礼な話だが、亡くなった人間のことを思っても復活は無い。ただ、思い出の中で生きていてくれればいい。――――――――――――――――――――そんなものは詭弁だ。
どれだけ割り切っていても悲しみは消えないし、逆に悲しむことを止めてしまったらいけないと思う。それがいつまでもその人を想っているという証だと思うから。
ぱたり、ファイルが閉じられる。外を見ればもう暗い。労働時間もそろそろ終了だ。

「バカてんちょーっ！　帰りますよー！　さっさと来てくださーい！」

”代理”をつけろ”代理”を。
ドアの向こう側から聞こえる少女の声にそう呟くと、陸斗はファイルを棚に戻し、荷物である灰色のドラムバッグを肩に背負って、部屋を後にした。

墨田区のとある高級住宅街。
旧日本風の庭園付き豪邸から、西洋の館を模したような噴水付きの豪邸など様々な住宅が存在するこの街では夜になると出歩く人間は全くいない。
政府の要人やら大企業の社長やら、都心が消え去ったことにより全てが無くなった人間たちの最後の財のほとんどがこの地に集約されている。
一度ほぼ全てを失った人間は残った遺産に死ぬほど執着する。いくら体格のいいガードマンを連れていても銃弾の前には無力な人間だ。ただでさえ物騒な事件が起こっているというのに底に出てくるほど肝の据わった人間などいない。

「……ハッ、……ハァ……ッ…」

人一人として存在しないこの通りに荒い息遣いが響く。40kmマラソンでもしてきたのか、と問いたくなるほど荒い息遣いの”男”は夜の闇でも十分に映えるほど美しかった。
肩を越すまで伸びている純金の輝きが霞むほど、光のような輝きを放つ金色の髪。それに対するかのように瞳はオニキスのような夜と同じ漆黒。だが、その瞳の光は引き込まれていくような妖しい魅力を惜しげもなくふりまいていた。

一見するとどこか高貴な生まれの人間かと思う。が、服装はやけにボロボロでベルトがこれでもかと付いた拘束衣のような闇色の丈が長い外套。男の１８０はあろう長身とサイズはぴったりだったが、服装はあまり似合っているものではない。材質も革(かわ)のように見えるが、よく見ると違う。巨大な蝙蝠(こうもり)の翼を縫い合わせた様な、そんな艶と外見をしていた。

「チィッ……傷が思ったよりも深い、か……こんな環境じゃマトモに回復するどころか悪化する一方だしな……早いところ戻るか、〝契約者〟を探さねぇと本気で拙(まず)いことになるな……」

一般人には全く理解不能の言葉を男はどんどん紡いでいく。ただ、解ることと言えば男は傷を負っているということ。
壁に沿い、寄りかかって歩くような男の進んできた道のりには血痕など全くない。しかし、男は刀で切り裂かれた、銃弾で撃たれた。そんな具合に激しく苦しんでいた。
男は歩く。夜の道を、闇の道を。この先に待ち受けるものが何なのかは〝この世の君(ホゴシャ)〟と呼ばれた男でも解らない。

「――――――――それでねー、あの子ったらもう可笑しくて……」

「ハイハイ、近所迷惑になるからボリューム下げなさい。ただでさえお前の声は響くんだから」

「む、なんかバカにされたような言い方だ。バカてんちょーのくせに生意気だぞっ」

だから代理をつけろ、代理を。

地区何十年だが不明の自宅、ボロアパートへの帰り道を陛斗と一人の少女は歩いている。

茶色の長いツインテールがぴょんぴょん跳ねる少女、御門(みかど)平良(たいら)は陛斗が"店長代理"のレストランのアルバイトである。

本当はそこそこイイところのお嬢様で通っている高校も所謂お嬢様学校というヤツだ。しかし、災害によって両親を失い、一人残った彼女は一生暮らしていけるほどの遺産が有ったものの、本人曰く"社会勉強"のため自分の食いぶちくらいは少しでも稼げるようにとアルバイトをしている。……もちろん学校側には内密に、である。

「……ねぇ、てんちょー」

「んぁ？　んだよいきなり沈んだような声出しやがってなんかあったか？」

陛斗が尋ねると、平良はふるふると首を横に振って言葉なく、否定した。ただ、言葉の代わりに陛斗の手を握ってきつく身を寄せた。

「……オイ、何の真似だ。婚前の女子がそういうことをするな。軽い女だと思われるぞ」

若干の威圧が有る声で陛斗は言い放つ。しかし、彼女は離れない。むしろさらに身体を寄せて、一ミリの間も無い。
今の季節は冬。夜は昼間よりも格段と冷える。コートを着ていても寒いものは寒い。
寄り添うお互いの体温を交換し合う右側は寒さを感じない。手袋も付けていない手は平良が両の手でしっかり握りしめ、包み込んでいるからだ。おまけに肘の部分は妙に柔らかい感触が有る。
……役得、かも。いやいや、いけないだろ？　別に付き合ってるわけでもないし、店長代理とアルバイト。俺たちの関係はそんなものだ。
――――離れろ。聞かないなら無理やりにでも引き剥がすつもりだったが、その言葉は平良の放つ言葉によって吐き出されることは無かった。

「天木第零(あまぎだいぜろ)高等学校女子生徒連続殺人事件のこと……どう思ってる？」

「――――――――――――――――！？」

またそれか……もういいだろ。関わりたくないんだ……
テレビの前のキャスターもラジオのパーソナリティも他人も、バイ

トもどいつもこいつも人様の心を抉るのが大好きらしい。
『主よ（エリ・）、何故（エリ・レマ・）我を見捨てたもう（サバクタニ）』
信奉者ではないが、今は祈ろう。

「どうもこうもない。ただの殺人事件だ」

「ちょっ、それだけで終わらせていいの！？　てんちょーが通ってた学校でしょ？　自分の知ってる人間が殺された事件に何にも感じないのっ！？」

五月蠅（うるさ）い……今は気分が悪いんだ。理由は不明だが、頭が酷く痛い
……
強く歯噛みしながら陸斗は頭痛に耐える。平良が何か言っているようだが、あまりよく聞こえない。視界が歪む。何かに引き寄せられるような、思考が先へ先へと闇の中へ導く。

――――――――――bdybeofunaeugyiavdye
vifbewuobuidgaifboeanfpinaeubf
wubda………

だから五月蠅いって言ってるだろ……！　いい加減にしろよ！

「てんちょー？　ちょっと、大丈夫！？　顔がすごく青白いよ！？
ごめん、私がヘンなこと言っちゃったから……急いで帰ろ？」

「……ああ、わかった。いいか、よく聞け。あの事件はただの変態サイコ野郎が起こしたただの殺人事件だ。二度と俺の前で口にするな……っ！」

平良が頷く。そしていったん離れた手を再度つないで歩き出す。そうして家に帰る。帰れるはず、だった。

――――――――――――あの声が呼び止めるまでは……

「酷いじゃないか、私の事を変態サイコ野郎だなんて。まさか、陛くんからそんな汚い言葉が出てくるとは流石の私でも予測できなかったかな？　十年も一緒なのに私もまだまだ陛くんのことをよくしらなかったってことなんだろうね」

背後で声が呼んだ”陛くん”と。それは蒲武陛斗という人間の愛称。定着していた十年前、それ以降その愛称で陛斗を呼ぶ人間は一人しかいない。

――――――振りかえるな。幻聴だと思え。有り得るはずがない。だって、アイツは………

脳が呼びかける。だが、理性ではなく感情が声の在り処を求め彷徨う。そして、振り返る。

「やあ、陛くん。久しぶり？　でもないかな。だって、私が死んだところには毎日来てくれてたしね。でも、こうやって顔を見れただけでもこの上ないくらいに嬉しいよ」

空気よりも澄み渡り、水よりも柔らかい。その声の主は陸斗に微笑んだ。

腰まで伸びた長い黒髪。瞳は深紅のルビー色。服装は天木第零の女子制服。見間違えるはずなど無い。十年間彼女を見続けてきたのだから。誰よりも近くで、誰よりも知っている。

それは最後に陸斗が見た彼女、八束（やつか）小夜合（さより）と寸分の違いもなく、目の前に存在していた。

第一夜　堕天――Ｆａｌｌ　Ｄｏｗｎ――（後書き）

な、長い……本当はもっと内容を詰め込みたかったのですが、長すぎるのもアレなので次話にしようと思います。

感想など、頂けたら幸いです。

第二夜　罪悪の王――Ｂｅｌｉａｌ――

言葉が出ない。死んだと思われていた人間がこうして目の前で微笑んでいる。

眼前の彼女、小夜合（さより）が死んでからやはりどこか自分は空虚になっていたのだろう。１０メートルもない距離のうちに居る彼女を見ただけで心が満たされていく事を実感する。

「小夜合（さより）…………」

自然と歩が進んでいく。平良の腕を振り解き、陸斗は吸い込まれるようにして彼女の元へと近づく。

あと７メートル。５メートル……３メートル。手を伸ばせばその頬に触れられる距離に陸斗は既に近づいていた。

右手が挙（あ）がる。彼女、小夜合に触れるため。彼女を抱きしめるため。

今更だが、ようやく実感することができた。俺は小夜合の事が好きだ。たったの１ミリの距離さえ煩わしい。そんな位愛おしい。

背後で平良が何か叫んでいるが、全く聞こえない。いや、聞く必要なんてない。俺が愛しているたった一人の女以外の声なんて聞いても仕方がない。小鳥のさえずりなんて耳に心地良いものではない。工事現場で鳴り響く削岩の音となんら変わりのない。ただの雑音（ノイズ）だ。

指が頬に触れるまであと数秒もかからないだろう。なのに、どうしてこんなに時間が遅く感じるんだ？

俺は早くその暖かさをこの手で感じたいのに……どうして……！

「――――――――てんちょーっ！！」

平良の必死の叫びが夜の闇で響く。それは一瞬、陛斗の思考を正常に戻した。

刹那。小夜合が纏う制服の袖口から閃光が解き放たれる。その直前、陛斗は無意識中に脚へと全神経を集中させて地を蹴って後方に飛んでいた。

そして迸る閃光――――――！　光を見た陛斗は一瞬何が起こったのか状況判断が全く不明だった。変化に気が付いたのは視界の端を半円の物質が左横へと飛んでいく様を見届けてからであった。

陛斗が羽織る紺の外套、その丁度中心にあるボタン。在るべき筈のものが存在していなかった。

おまけに横一直線にコートの中央部分がふたつに裂け、バサァと羽のように下半分の布が広がった。冬の寒さが一気に流れ込んでくる。だが、そんなことは気にもならなかった。ただ、ただ、陛斗は目の前の光景に唖然とするしかなく、目を見開いた。

「あれ？　おかしいな……絶対に斬れると思ったんだけど。――――ああ、その女か。陛くんの彼女でもない癖に彼に寄り添うその売女。儚過(はかな)ぎて視界にも移らなかったよ」

くすくすと笑う小夜合。まるで平良をまるで眼中に無かったかのように言う口は嬉しそうに歪み、だらんと下がった右腕には刃渡り65~70の鋭い輝きを晒す日本刀。その刃を直視した瞬間に悟った。

自分は”アレ”で斬られたのだ、と。

「……どう……、…して……？」

未だ現実が信じられなくてそんな陳腐な言葉しか口から吐き出されない。
平良が腕を引っ張って無理やりにでも共に逃げようとする様子がわかるのだが、地面に氷漬けにされてしまったかのように脚が全く動かない。
……待てよ。思い出せ、小夜合はなんて言っていた？

『酷いじゃないか、私の事を変態サイコ野郎だなんて……』

嫌な汗が背を伝った。
旧千代田区『災害地区Ａ』での女性徒転落自殺。その後間もなく起こった天木第零（あまぎだいぜろ）高等学校女子生徒連続殺人事件。被害者は全て内臓から脳まで全てブロック状の肉塊のように惨殺されていた。
――――専門家によれば恐ろしく切れ味のいい刃物。恐らく日本刀の系譜を持つ刃物だと考えられる――――。
小夜合が右手に持つ刃物、刃渡り６５～７０の日本刀。繋がった。
繋がってしまった。
がたがたとなる歯の音が酷く耳に残る。落ち着かない口元を無理やり開く。

「ほん……とうに……、…殺した……のか……？」

「？　さっきそう言ったよね。やだな、でも私は変態サイコ野郎なんかじゃないよ？　ただ、復讐しただけ。私を殺した奴らに」

なんの躊躇いもなくあっさりと言い切る小夜合。続きを求めていると陛斗が思ったのか、さらに言葉を紡いでいく。

「私ね、陛くんが学校辞めてからクラスの女の子に酷いことされたんだ。陛くんが一年の時にやらされたのとほとんど同じこと。教科書破られたり、椅子が消えてたり。――――――――まぁ、それぐらい全然堪えなかったんだけどね。ただ、陛くんが学校辞めたことの方が数億倍悲しかった」

一旦目を伏せる小夜合。悲しそうに見えるが、やはり口元は愉しそうな三日月形に歪んでいた。そして続ける。

「それでね。せめて陛くんの顔くらいは毎日見るようにしよう～！　って意気込みながら陛くんの働くレストランに行く帰り道。携帯が鳴ってさ……『蒲武くんが旧千代田の崖で不良に絡まれてる～』ってメールが友達から来たんだ。
もちろん、陛くんが喧嘩で負けることなんてないと思ってるよ？　けどね、やっぱり心配だったんだ。あそこは崖があって危険な地域だから、何かあったら私が助けなきゃ、って。そう思って送信されてきた場所に行ったら………陛くんどころか、誰もいなかった」

小夜合が下校する時間帯に陛斗はレストランで仕事中だ。不良にな

ど絡まれた覚えなんてその日どころか一年は無い。
陛斗は悟った。つまり小夜合は――――――――――

「――――――――騙されたんだ、その友達に。陛くんを探そうと周りを見渡してたら急に後ろから強く押されてさ、それから奈落へ一直せ～ん。どう？　面白いかったかい？」

可愛らしい上目遣いの彼女に陛斗はどうしようもない恐怖を感じた。……面白い？　どこがだ。なんで自分が死んだ話をそんな面白可笑しく、子供に聞かせるように話せるんだよ。崖から落ちてその先何が有ったんだよ。今ここに居て自分を殺した人間どころか俺まで殺そうとしてるお前は何なんだよ！？
頭がごちゃごちゃに掻き混ぜられて、気持ち悪い。脳みそをミキサーで切り刻んでからぐちゃぐちゃにされているような感じだ。
死ぬ。絶対に死ぬ。ここに居ようがここに居まいが、絶対に俺は今日死ぬ。生き残ることのできる確立など無い。逃げ切れるはずなど無い。運命だ。蒲武陛斗という人間の生はここで終わる。
陛斗は絶対なる確信をしてしまった。……なら、せめて平良だけでも逃がさなければ。このまま小夜合(さより)に目を付けられたら絶対に死ぬ。
だから………

「――――――――げろ………」

「……え？」

「逃げろッ！！」

陸斗は闇を裂き咆哮しながら走り出した。手に有る柔らかい感触が平良の、彼女の存在を肯定していてくれている。
少女に背を向けて走り出すなんてこの上ないくらい無様だが、そんなことを気にしていられる状況でもない。プライドなんて塵になってしまえ、恥なんて知ったこっちゃない。
危機感と必死さが腕に力を込めさせ、握る手がきつくなる。平良が痛ッ、と顔を歪める。それをごめんの一言で締めると陸斗はさらに脚に力をさらに入れ、コンクリートの地を蹴る。

「てんちょーっ！　前っ！」

平良が何かを見つけたように叫ぶ。陸斗は後ばかり気に気を回し過ぎて前を見ているはずもない。高いソプラノ声に気づかされた直後に前方へと振り返ったのはいいものの、対象との衝突は免れるはずがない。それは”人”。高身長で肩までかかった金髪の容姿端麗な美青年。衝突まであと1秒も無い。
陸斗は青年の瞳と瞳が合った。吸い込まれるような漆黒の瞳。——
——まるで夜のようだ……
そう感じた瞬間、背中に強い衝撃を感じた。次に身体を貫く無機質な感触。下を見れば鋼色の刃が胸を、心臓の位置を丁度貫くようにして顔を出していた。
……ああ、死んだな。これは……
平良が絶叫する声が耳に残る。ひどく遠く感じたものだったが、きちんと聞こえた。前のめりに倒れていく。そのまま冷たい地へと肌を打ちつける………はずが、陸斗は前方へと何か強制的に引っ張

られるようにして”跳んだ”。

コンクリートの固い地面から宙に浮く。重力が無くなったように身体から力が抜ける。

世界が一瞬にして、夜の闇から燃え盛る炎が覆うものへと塗り替えられていく。全てを焼き尽くすであろう業火が支配する世界。——地獄、とでも形容すればいいのか、この世では目に掛かることなどまず不可能な光景だ。その炎が支配する世界で陸斗は浮かんでいる。

《へぇ、まさかこんな所に”契約者”が居るとは……つくづく俺は運がいい》

誰だ……？　あの男か？

姿の見えない声の主。だが、声の主が陸斗をこの業火の世界へと連れてきたのだろう。それくらいは予想できたが、逆にそれくらいしか予測できなかった。

《誰、とかそんなことはどうでもいい。今のお前には”生きる力”と”破壊する能力(ちから)がいるんだろ？　そこのところどうなんだ》

”生きる力”と”破壊する能力”

心臓を貫かれ死んだ陸斗には生きる力が必要だ。そしてその先で生き残り、平良を守るためには破壊する能力が必要だ。

だが、あの小夜合は？　例え力を手にしたとしても小夜合を放っておくことはできない。明らかにあの彼女は正気ではない。崖から落

ちたというのに生きていたとしても無傷は絶対に有り得ない。しかもどこか妖しい催眠でもかけられたかのようにどんどん彼女に引き込まれていって……アレは何かに取り憑かれたかのような、そんな感じがしたは気のせいだったか……？

《残念ながらソイツは気のせいなんかじゃない。あの女は”もう死んでる”。そして魂が悪魔の血に取り憑かれてるってわけだ。ご愁傷サマ》

”悪魔の血”？

《お前等の世界で流行ってるだろ？　『謎のウィルス蝕魔（イクリプス）』って。ソイツの正体だよ。吸い込んだ人間は悪魔の死にかけても死なない強大な再生能力や力を得る。その代わりに一時間も経たずに悪魔の血に支配されて、不死の殺人者が完成する。お解り？あの女はもう悪魔みたいなモンだ。いくら切り裂いても鉛玉ぶち込まれても死なない》

『謎のウィルス蝕魔（イクリプス）』沈下した都心の大穴で発生しているという噂が学生の間で流行っているものだ。根も葉もない噂だと陸斗は鼻で笑ったこともある。
だが、それは実在して幼馴染が感染した。否、取り憑かれた。そして殺人事件を起こしたということだ。……だったら救いたい。単純に小夜合（アイツ）の意思で事件を起こしたわけじゃないってわかっただけでだいぶ違う。絶対に救う。これ以上あのアイツに血を浴びさせるわけにはいかないから。そしてもし、できることなら……

陛斗は心の中で思ったことが伝わるこの空間で初めて自らの口を開く。

「解った。お前の望むモノをやる。その代わりに一つだけ教えろ。アイツを人間に戻すことは可能なのか？」

《……可能だ。肉体は完全に再生しているから、魂さえ解放すれば人間に戻すことも可能だ》

「了解した。――――――――――――――契約しよう」

《毎度どうも。ただ、解ってると思うが言っておく。あくまでＧｉｖｅ ａｎｄ Ｔａｋｅだ。タダだと思ったら大間違いだからな》

解ってる。

一言淡白にそう返答すると、再度世界が塗り替えられていく。炎が支配する世界から夜の支配する世界へ。空（くう）から無機質なコンクリートへと――――――――

《あの世界へと戻ったら俺の”名”を呼べ。それで契約完了だ》

ビデオの逆再生のように元に戻っていく世界。時間が巻き戻されていくような中で陛斗は瞳を閉じて誓う。謝罪はいくらでもする。その代わりに小夜合（オマエ）を絶対に取り戻す、と。

闇の世界。高級住宅街の路地。元の世界だ。
胸からは飛び出した日本刀の刃と底から飛び出す鮮血。普通なら絶対に即死。またはじわりじわりと苦しんでから死ぬ。
だが、今の陛斗は”普通”ではない。絶対に即死することも、じわりじわり苦しむことも無い。
背後で日本刀を突き刺す小夜合、いや、悪魔の顔が驚愕に染まる。
もちろんだ。只の人間は刀や銃の前では無力であり、心臓に刃を鉛を食らって死から逃れる術は無い。
有り得ない、有り得ない。何故この男は生きているのだ!？　小夜合の姿をした悪魔は自己問答を繰り返す。そんな背後の悪魔に陛斗は振り返って微笑んだ。

「やっぱオマエ小夜合じゃねぇわ。よーく見ると気持ち悪ィ。折角美人の皮を被ってんなら内側までしっかり美人にしとけ。なあ、そう思うだろ………罪（ベリアル）と悪の王ッ！」

《ああ、同感だ。外見が美人でも内側が腐っていたら抱く気にもなれない》

瞬間、陛斗の周囲を黒い炎が囲った。
どこからか噴き出した黒い炎は悪魔を焼くかと思われたが、噴き出す直前。”名”を叫んだ時に数歩後方へとバックステップして回避していたらしい。だが、突き刺されたままの日本刀は炎に触れると、その鋼の刀身から柄、鍔まで全て”腐り落ちていく”。
そして腐った刀がボトリと地に落ち、灰になっていくまで約5秒もない。その間に刀で突き刺された傷は全て無かったかのように消え去り、服の傷だけが残った。その様子に傍で見ていた平良だけでなく、悪魔も目を見開いてその様を凝視していた。そして陛斗の黒い髪に純金さえも霞む金色の長髪が追加されていることに気が付く。

「ま……まさか、地獄からも追放された最強にして最悪の悪魔……！ 罪と悪の王(ベリアル)と契約したというのか！？ 小僧、それがどれだけの代償を払うのか解って……！」

『《欲すれば代償を。Give and Take 人間は大好きだろ？ 買い物がさ……つーか、オマエもう喋るな》』

若干エコーのかかった声で陛斗が言い放つ。すると、悪魔には一直線に突進する黒い炎の化身が眼前に見えた。――――――――早いッ！
咄嗟に腕を前に出して守る。衝撃が襲うまで秒単位も無かった。拳

が裏拳を捉え、一気に爆発する。
風が空気の砲弾のように悪魔の背後へと通り抜け、見える限りの道の落ち葉を木端微塵に舞い散らせるまで砲弾は持続した。

『《こんなものか……まぁ、まだ慣れてないし加減も随分しただろうから仕方ない》』

これで随分加減しただと！？冗談も対外にしろっ！
悪魔は叫びたくなったが、そんなことをしていたら殺される。一刻早く逃げなければ……！恐怖の感情が小夜合の身体を持つものを支配していた。
悪魔が背を仰け反らせると、背中が衣類を破り飛ばしながら弾け、そこから黒い翼を出現させた。
天使の翼をそのまま黒くしたような翼が羽ばたき、地を離れる。空を飛んで逃げるという作戦なのだろう。

『《翼まで生やせるってか……ベリアル、俺たちは飛べるか？》』

《翼を生やして飛ぶまでも無い。地面を軽く蹴るくらいで十分だ》

『《了解した。平良、そこから動くなよ？　いい娘（こ）にしてたら後で可愛がってやるよ》』

挑発的に嘲笑するいつもと様子が１８０度違う陸斗。だが、不思議

と平良は顔が熱くなるのを感じ、自らが自覚する前に首を縦に振って頷いていた。
それに呼応し、ふっ、と笑うと陛斗は脚に神経を集中して、地を蹴った。軽い。
宙に浮いている身体が恐ろしく軽く感じる。だが、地面が割れる音を聞いた。どうやら脚力がヤバイことになってるらしい。まぁ、今更か。
一度の軽い跳躍で数十メートル先まで飛んでいた悪魔に追いつくどころではなく、悪魔の真上まで飛んでしまった。やり過ぎかもしれないが、丁度いい。

『《接続（アクセス）――――――――――――――招来せよ罪人の逆十字（アンチクロス）》』

呪文を唱え終えると、掌に黒き炎が集約していく。陽炎のように形の不規則な黒炎は掌で徐々に形を為し、ついには一つの個体を完成させた。
一直線の細い四角柱のような柄、唾もまた一直線の四角柱。刀身は細く、重厚な印象の黒ながら洗練され、耽美な艶の全てを塗りつぶす漆黒。
１メートル７０はあろうその黒き逆十字は一言で表すなら”冷酷”。
慈悲など無い、ただ消えろと。
陛斗は翼をはためかせ飛ぶ悪魔の背に狙いを定めながら、一気に落下していくと、無慈悲の象徴をその背中になんの躊躇いなく突き刺した。

「――――――――がアッ！？」

悲鳴とともに飛び散るのは真っ黒のヘドロが飛び出したかのような液。これが悪魔の血なのだろう。

両翼の間に突き刺さった漆黒の逆十字を深く深く、突き刺していくと今度は徐々に引き抜いて行く。

刀身には飛び出したヘドロの塊のようなものが逆十字が引き抜かれていくとともに小夜合の身体から抜かれていく。刀身を全て引き抜くと、その塊は宙へと漂う霊のようになり、塊を引き抜かれた小夜合の背中から生えていた翼は石になったように砕け散り、消え去った。十字で突き刺した時の傷も無い。ぐったりとして、眠ったような表情の小夜合の肢体を左腕でしっかりと抱きとめると、黒の塊を見据えた。のろのろとした様子で宙を彷徨い逃げているようなのだが、その動きは遅い。

《全く、汚い魂だが仕方ない。――――――――――――――――俺様が喰らってやる。泣いて懺悔しろ、それがせめてもの救いだ》

陸斗の身体の中でベリアルが、嗤う。すると、今度は陸斗の背が弾け飛び、翼が広がっていく。

小夜合に憑依していた悪魔とは全く逆。穢れのない純白で炎を顕しているのか、若干の赤味がかったまるで神話の天使のような巨大な翼だった。

その天使の翼が変形し、形を変えていく。何百と付いた羽は全て肉はおろか、魂さえも引き裂く凶牙（アギト）へと。翼の本体は人など簡単に呑み込めてしまうであろう巨大な顎へ。

翼で形成された怪物は黒き塊、悪魔の魂へと迫ると一気に喰らいつき、欠片も漏らさぬよう顎で包み込んでから堪能などする筈もなく、噛み砕いた。

ぎちゃり、ぐちゃりと嫌な音が数回続き、やがて止んだ。同時、陛斗の身体(なか)に何かが流れ込んできた。悪魔の魂の情報だろう。解析するのは後にして、陛斗は目を閉じて安らかに眠る小夜合の身体を両腕で抱き直すと、地上へと降り立った。

《さて、願いは叶えてやった。約束は約束だ。俺様の願いを叶えてもらう》

「ああ、解ってる。俺の魂でも肉体でも寿命でもなんでも持っていけ」

《そうかい、じゃあ――――――――――――――――――――――――》

第二夜　罪悪の王――Ｂｅｌｉａｌ――（後書き）

な、なんとか今日中に書き上げたゼ……血反吐を吐きながら（嘘）

感想、ご意見など頂けたら励みになります。というか、感想くださ
い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8660y/

原罪のノクティス

2011年11月28日00時48分発行